

666

102

666-102



1200501573912

推薦圖書目錄
第二十二輯

大日本青年團本部編

701

66
10

昭和十五年四月

推薦圖書目錄

第二十一輯

大日本青年團本部

はしがき

本團が青年の讀物として適當なる圖書の推薦をはじめてから既に十三ヶ年の歲月を閲したが、此の事業は毎回非常な好反響で迎へられてゐる。

圖書の推薦方法は本團に推薦委員會を設け、新刊圖書に就き毎年二回委員會を開催して、慎重審議の上青年及び青年指導者の讀物として適當なるものを推薦し、其の都度本目錄及び日本青年新聞を通じて夫々發表して來たものである。

今回の推薦圖書は昨年七月以降本年二月までの間に出版されたものの中から、左記諸氏並に本團關係者によつて二月十二日帝國圖書館に於て、五十七冊を嚴選したものである。



- | | |
|------------|--------|
| 帝國圖書館長 | 松本喜一氏 |
| 日本放送協會教養部長 | 小尾範治氏 |
| 東京帝國大學助教授 | 青木誠四郎氏 |
| 文部省社會教育官 | 小山隆氏 |
| 文部省囑託 | 伊藤治郎氏 |
| 帝國圖書館司書 | 岡田溫氏 |
| 帝國圖書館司書 | 舟木重彦氏 |

本團よりは、栗原常任理事、及び熊谷總務部長、田中參事、増谷編輯課長、其の他係員が出席した。廣く青年團並に青年教育關係方面に於いて利用せられんことを希望する。

昭和十五年三月

大日本青年團總務部編輯課調査班



666
102

目次

修養・處世

| | |
|-----------------------|------------|
| 日本産業道…………… | 大倉邦彦著…(一) |
| 明るい生活…………… | 佐藤義亮著…(二) |
| 日本の前進…………… | 永田秀次郎著…(三) |
| 日本の進路…………… | 松村秀逸著…(三) |
| 新技術者精神…………… | 宮本武之輔著…(四) |
| 事變はどう片づくか…………… | 小林一三著…(五) |
| 道元禪師の生涯と信仰…………… | 中根環堂著…(六) |
| 現代の問題としての復古思想…………… | 竹岡勝也著…(七) |
| 戦友に懇ふ…………… | 火野葦平著…(八) |
| 政治・社會・經濟・兵事 | |
| 經濟上より見たる 支那事變の本質…………… | 木村増太郎著…(九) |

| | | |
|---------|----------------------|------|
| 大戦外交讀本 | 外務省情報部編 | (二〇) |
| 東亞民族論 | 高田保馬著 | (二一) |
| 支那 人 | 東京日日新聞社編 大阪毎日新聞社編 | (二三) |
| 日本の社會事業 | 中央社會事業協會編 | (二三) |
| 統制經濟講話 | 波多野鼎著 | (二四) |
| 世界の空軍 | 中原稔生著 | (二五) |

歴史・傳記・地誌

| | | |
|-----------------|--------|------|
| 皇國二千六百年史 | 藤谷みさを著 | (二六) |
| 滿洲建國讀本 | 徳富蘇峰著 | (二七) |
| 支那文化史觀 | 出石誠彦著 | (二八) |
| 野口英世 | 小泉丹著 | (二九) |
| 郡司大尉 | 廣瀬彦太著 | (三〇) |
| 昭和の 軍神 西任戰車長 | 菊地寛著 | (三〇) |

| | | |
|-----------------|-------------|------|
| 空の 英雄 藤田雄藏中佐 | 森川肇著 | (三一) |
| 福山航空兵大尉 | 野口昂著 | (三一) |
| 戦歿將士陣中だより | 東京日日新聞社學藝部編 | (三三) |
| 澁澤榮一傳 | 幸田露伴著 | (三四) |
| 洋車 | 須田皖次著 | (三四) |

體育・衛生

| | | |
|-----------|---------|------|
| 健康の醫學 上・下 | 日本放送協會編 | (三五) |
| 灸の醫學的効果 | 田中恭平著 | (三六) |

科 學

| | | |
|---------|------------------------|------|
| おはなし電氣學 | 佐野昌一著 | (三七) |
| トンネルの話 | アーチバルト・ブラック著 平山復二郎譯 | (三八) |
| 野生動物記 | ヘステインクス著 内山賢次譯 | (三九) |
| 天文と宇宙 | 荒木俊馬著 | (四〇) |

文學・藝術

- 花と兵隊……………火野葦平著…(三)
- 山ゆかば……………山本和夫著…(三)
- 吳淞クリーク……………日比野士朗著…(三)
- 分隊長の手記……………棟田博著…(三)
- 病院船……………大嶽康子著…(三)
- 聖戦歌集……………讀賣新聞社編…(三)
- 宮本武藏……………吉川英治著…(三)
- 日は昇る……………相馬御風著…(三)
- わが人生と宗教……………吉田絃二郎著…(三)
- 土と戦ふ……………菅野正男著…(三)
- 新洋楽夜話……………太田黒元雄著…(三)

産業

- 轉業指導講座……………東京商工會議所編…(四)

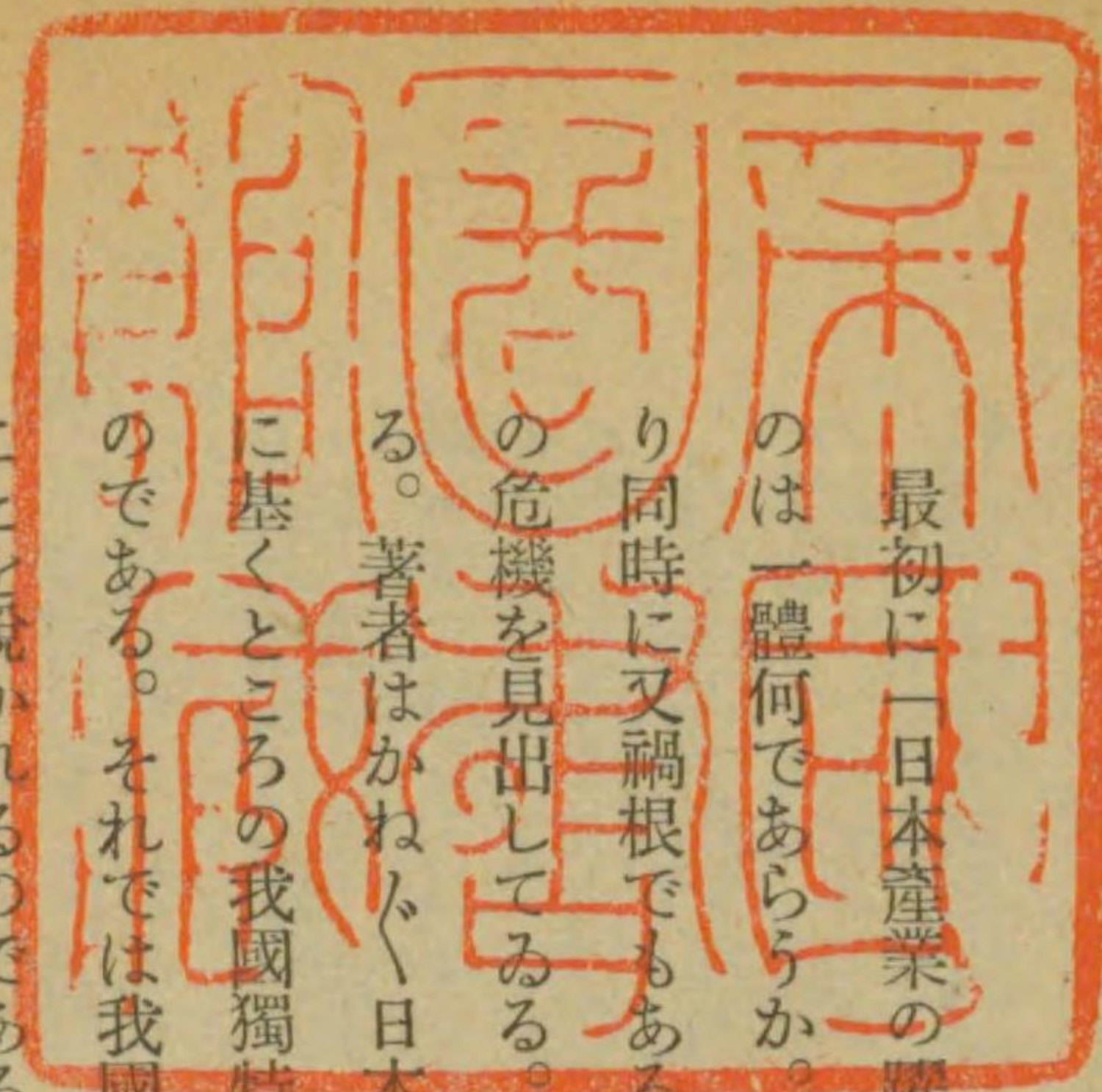
- 農村共同炊事の手引……………森川規矩共著…(四)
- 營養……………増田正直共著…(四)
- 時局農村の副業と工業……………農林省副業課編…(四)
- 青年の産業研究……………大日本青年團本部編…(四)
- 米……………東畑精一著…(四)
- 水稻栽培の實際……………宇垣猛著…(四)
- 蔬菜病害蟲……………織田富士夫共著…(四)
- 堆肥……………瀧本清透共著…(四)
- 機械工業講話……………吉田一夫著…(四)
- 化學工業講話……………東京商工會議所編…(四)
- 廣告の常識……………東京商工會議所編…(四)
- 栗屋義純著…(四)
- 漁村計畫と漁業組合……………小石季一著…(四)
- 時局と漁業組合運動……………星四郎著…(四)

修養・處生

日本産業道

大倉 邦彦 著

四六判 三三三頁 二・二〇 日本評論社



最初に「日本産業の躍進とその危機」と云ふ項がある。躍進と云ふことはよく分つてゐるが、危機と云ふのは一體何であらうか。著者は、歐米流の唯物主義と機械文明とに依つて發達した近代産業の、特徴でもあり同時に又禍根でもある個人主義、功利主義、自由主義を取り上げて之を嚴密に批判し、その中に日本産業の危機を見出してゐる。そしてこの危機を救ふ意味での日本精神を説くことがこの一巻の重要な目的である。著者はかねて日本精神の本質として、祭、政、業の一致と云ふことを説いて居られる。この日本精神に基くところの我國獨特の産業道、これこそ我國近代産業をその危機から救ふ唯一のものであると説かれるのである。それでは我國獨特の産業道とはどう云ふものか。こゝで著者は新に産靈（むすび）の精神と云ふことを説かれるのであるが、この産靈の働きと云ふのは、神業へ人間が合流して行つて、そこに物を産み出して行く業である。儒教流で云へば天人合一とも云ふ可きこの産靈の精神が、神物一體、物心一如を固有の精神とする日本人にとつて、最も指導的なものになるべきであると説くのである。

この様にして日本産業道の本質を第一の問題として居るが、つゞいてその實際問題として、人事管理のこ

と、福利施設のこと、教養の問題、勤勞と修養の問題等、何れも産業に關連して説かれてある。記述は別段難解のものではないが、取り扱はれた主題の關係上どちらかと云へば指導者向のものである。

明るい生活

佐藤義亮著

四六判 二四三頁 〇・五〇 新潮社

極く軽い「處世新話」とも云ふ可き讀物である。この著者はいつも「人は、心に太陽を抱いてゐるやうな朗かさ、明るさがなくてはならぬ」と云ふことをモットーとしてゐる。本書で述べらるゝ處、亦隨所にこれに觸れてゐることは書名から見ても明かである。

内容は二十話を集めたもので、その一つ一つを紹介するわけには行かないが、例へば最初に「事變と生活の建直し」と云ふのがある。源頼朝の家來で、當時洒落者の噂の高かつた筑後權守俊兼と云ふ氣取り屋を、頼朝がその小袖を短刀で切り裂いて華美柔弱を戒めたと云ふ逸話から筆が起してある。無論目的は事變下に於ける國民の經濟生活の自肅自制を説く處にある。昨年我國に來朝した獨逸のヒトラア・ユーゲントの一行が東京に着いて帝國ホテルで食事をした時、戦時下だと云ふのに食事の皿數の多いのに驚いたと云ふやうな話も挿入されてある。勿論日常生活に於ける贅澤を戒めた皮肉な挿話である。こんな風な處世新話が二十篇集められたもので、之が挿入された漫畫家細木原青起氏の繪と共に誠に面白く、然も教へらるゝ處多く讀ま

れる。元來は雑誌「日の出」に昭和十二年の暮から十四年十一月迄に掲載されたものゝ中から選ばれたものゝ由。著者は新潮社長であることは云ふ迄もない。

日本の前進

永田秀次郎著

四六判 二二八頁 一・〇〇 新潮社

昨年八月著者は「日本の進むべき道」と云ふ放送講演をされたが、この本はこの時の講演を骨子として若干の補足をされたものである。いつもの様な平明洒脱な講演で、新東亞建設の爲に邁進すべき日本帝國國民の、大國民としての品性を説いたものである。特にこの著者が冷靜な態度で、歐米人の非とすべき處は飽く迄之を明瞭にして追及すると共に、彼等のよい點は公平に之を認めて我々に反省を促してゐる點は大いに教へらるゝ處であらうと思はれる。

尙卷末に「彌榮の日本」と云ふ一文が第二編として加へられてあるが、民族的な團結に依つて彌榮の日本を建設しやうと云ふ青年向のものである。

日本の進路

松村秀逸著

四六判 三二四頁 一・三〇 大日本雄辯會講談社

著者は戦時下日本の陸軍の耳と口を背負つて立つ陸軍情報部長。この本は著者が新聞や雑誌に執筆したり

放送や講演されたものをまとめて上梓したものである。

内容は「戦ふ日本」「歐洲はどうなるか」「陣中雜記」「放送四題」「疾驅廣東」に大別されてあるが、主要な部分は初めの二つである。この二つは日本を廻る東亞の情勢と、歐洲の戦争とを出来るだけ平易に、著者の言葉を藉りて云へば「政治部的なものを社會部的」に書かれたものである。次の「陣中雜記」には著者の親しい友人で、不幸戦病死された御厨大佐、漢水河畔で壮烈な戦死を遂げた航研機で有名な藤田中佐、南京城島で散った溝口少佐の思ひ出の文が掲げられてあるが、短かい文章ではあるが感動なしには讀まれない。「放送四題」では保定會戰の話、蘭州爆撃と南昌の戦車追撃戦の話等が收められてあるが、これ又多大の感激を覚えしめるものである。最後の「疾驅廣東」はバイアス灣敵前上陸以來廣東への進撃で、火野葦平氏の「土と兵隊」と場面が同じである。何れも生き生きとした。そして戦争全般の動きをわかりよく書かれた讀み物である。

新技術者精神

宮本武之輔 著

四六判 二二頁 一・二〇 三省堂

この著書は未だ一高の學生であつた時、校庭の大煙突に昇つて墜落し、瀕死の重傷を負つたが奇蹟的に一命を取止めたと云ふ話題の主である。この著者の滅私奉公の精神は實にこの時以來のもので、自分は既にこ

の時一度は死んだものである。奇蹟的に助かつた生命は、自分の命にして然も既に自分のものではない。この様にして己を滅したひたむきな生活が始まつたのである。そして今日興亞院技術部長の要職に在られる。この本は滅私奉公と云ふ眞に日本人的な道念に基いて、興亞の大業に協力すべき技術者は如何なる心構へであらねばならないかと云ふことを淳々と説いたもので、巻頭に收められた「新技術者精神」といふ一文が全體の書名ともなり、又全卷の總論ともなつてゐる。以下現在我國の技術界が直面しつゝある個々の具體的問題を取上げて、之が解決について論ぜられてゐる。そして事變の今日の段階に於て技術の占める地位の重要性を強調し、之が直接の擔當者たる技術者に強烈な國家意識と旺盛な民族的自覺と、更に正しい科學精神が缺く可からざるものであることを結論してゐる。技術關係者には是非薦め度い。

事變はどう片づくか

小林一三 著

四六判 三二〇頁 一・五〇 實業之日本社

實業界の新人的大立物として小林一三氏の名はあまりにも有名である。本書は標題そのものが人の注意をひくのであるが、各方面の異常な反響を喚び起したことは諸君の記憶にも新なことであらう。この書は評判のやうに確かに讀むに値する本である。事變がどう片づくかといふことは、今日誰しもの最大の關心事である。阿部前内閣が事變處理を目的として現はれ、現内閣がそれを繼承して、今も全力を盡して事變處理、事

變目的の完遂に努力してゐる譯である。著者の意見によれば、事變は將來の時期に片づくのではない。今や片づきつゝあるのである。國民は長期戦と共に長期建設を行ひつゝあるのである。その覺悟を確固としてあらゆる方面に建設の體制をとつて行かなければならない、と云ふのである。この意見はまことに尤もであり國民はこの氣構へで將來に向つて行かなければならない。事變が濟んだら元にもどらう、樂にならうといふ考へは捨てなければならぬ。事變と共に新たな秩序を作りつゝあるのだといふ覺悟に立たなければならぬ。この本の中で特に青年諸君に語つてゐる部分があるが、そこではその意味の新たな處生訓、對人生態度を説いてゐる。つまりは職能の思想、奉仕の觀念といつていゝものであるが、從來のやうな個人主義的營利の觀念や出世の觀念を捨て、萬人がおのれの職分をつくし、國家のために奉仕するといふ觀念に立たなければならぬ。この考へはまことに貴重であり、尊敬すべきものである。樂に讀める本であるし、是非諸君の一讀をお奨めしたいとおもふ。

道元禪師の生涯と信仰

中 根 環 堂 著

四六判 二三七頁 一・二〇 三省堂

道元禪師の哲學的研究をされた人として有名な京都帝大の田邊元博士は、その著述の中に「七百年前の我國の名僧道元の正法眼藏を讀み、その思辨の深さ綿密さに打たれて、日本人の思索能力に對する強き自信を

鼓吹せられた」と云つて居られる。云ふ迄もなく道元禪師は曹洞禪の祖で永平寺を開かれた名僧で、禪師の思想は我國哲學の最高峰に位するものとして最近特に業界の注目する處となつてゐる。

この本は禪師の風格、思想、信仰を手際よく、然も平明な記述に依つてまとめられたものである。最初に「道元禪師の風格」として略傳が記されてあるが、身は村上源氏の末、内大臣通親公の子として生れられた人であるが、清貧のその生涯は、そのまゝ求道の旅路であつた。こゝに尊い禪師の風格が現はれてゐる。次は「行の宗教」である所の禪の思想、禪の行の基調、及びその規範が説かれてゐるが、本來こゝは最もむつかしい所であるが、簡潔平明よくその要をつくしてゐる所に本書の特色がある。修養書として稍々むつかしい高級なものではあるが、本書の如きを入門書として、外國に迄誇り得るこのすぐれた哲人の思想を學び得たら、こんなよいことはないと思ふ。

現代の問題としての 復古思想

竹 岡 勝 也 著

新四六判 一〇八頁 〇・四〇 目黒書店

本書は興亞教育研究會編の教學新書の一編として刊行されたもので、文部省教學局主催に係る講習會の講演記録である。著者は九州帝大教授であり、日本文化史研究家として著名である。

本書は「明治維新の思想的考察」「西洋文化の批判」「日本文化の使命」といふ三篇から出來てゐる。近

來日本精神の擡頭につれ、日本的なもの、探究、日本歴史への反省は益々その度を高めつゝあるのであるが、そこに見出される復古の氣運復古の思想は果して今日の如き世界的舞臺に立つ日本にとつて如何なる意義をもつものであらうか。たゞ單に西洋的文化への對立としてのみ意義をもつものであらうか。それらのことは各方面から發言され、日本精神の進むべき道は説かれてゐるのであるが、未だ十分に闡明せられ、汎く把握せられてゐるといふ譯には行かない。本書は著者の周到な學識と經驗とから平明に説き與へられた一つの解答書である。著者は西洋と日本との根本的差異を認めながら、東西文化の融合を日本の使命とすることに同意し、それが日本の國體を中心として進められるところに、今日の復古思想・日本精神の生きた意義があるのだとするのである。平易で興味もあるから青年諸君に一讀をお奨めしたい。

戦友に懃ふ

火野葦平 著

四六判 八四頁 〇・四五 軍事思想普及會

今次事變を主題とした戦争文學の中では方に王座の位置に在る著者が、謙虚な心地を以て戦友に懃ふるの一文で、「戦場にあつてはたとへ一時間先に死なうとも、その一時間の間を兵隊として、人間として、立派に生きる、といふことが必要である。」又歸還しては「ああ、兵隊が歸つて來たために、こんなにも日本が良くなつた、町がよくなつた、村がよくなつたといはれなければいけないのである。」と云ふやうな處、誠に眞面目な著者の人格のよく現はれた好ましい讀物である。この外、この本には占據地域に進出して一攫千金を夢見る一部居留民の利己的行動を戒しめる「戦場より」と、二年振りで歸還してまのあたり見た銃後のさまざまな風景についての感想を綴つた「歸還兵士の言葉」の二篇が加へられてある。何れも極めて短篇ではあるが、出征將士も、大陸へ進出する人々も、銃後の國民の誰もが一讀して反省の資とすべき感激的好文字である。

政治・社會・經濟・兵事

經濟上より見たる 支那事變の本質

木村増太郎 著

文庫判 八〇頁 〇・三〇 目黒書店

本書は文部省教學局主催に係る徳島高等工業學校における木村博士の日本文化講義をその内容とするものである。

本書は今次の支那事變が我國にとり容易ならぬ困難な事情の下に置かれてゐること、それは一方に於ては支那社會組織の特殊性、殊に支那國民經濟の地方自治的な構造に基くものであり、他方我國自身の側における財政經濟の直面してゐる憂慮すべき事情をも考へ合せなくてはならぬものであることを明かにし、この困

難に打勝つて事變解決に邁進するため、日本全國民が支那並に日本の經濟財政をよく理解して、この重大時局に善處すべきことを要望してゐる憂國の言葉である。

支那においては、財政經濟が地方を單位とする自治的な社會組織を基礎として構成されてをり、支那全體としての有機的な組織體を形成してゐないこと、支那の人口過剰で貧民多くこれがいくらでも武装して戦線に送られること、支那においては或る意味で精神總動員が行はれてゐること、一九三五年の支那貨幣制度改革の成功等々が蒋介石が上海を追はれ、南京を棄て、漢口を逃げ出しても、今なほ一地方政權に轉落し切らせないわけを明かにし、従つてこの事變が當然に長期戦たるべきものであり、これを解決する鍵ともいふべき日本の財政經濟の力が問題となるわけであるが、これが決して無條件に樂觀を許さぬものであることを説いて、今日國民經濟の戦時體制編成の必要な所以、この完全な體制によつてのみ最後の目的達成の可能なこと、そしてこれには我國民全體のわけでも青年達の十分經濟的に目醒めた協力の必要なことを力説してゐるのである。

大戦外交讀本

外務省情報部編

四六判 一七六頁 〇・六〇 博文館

第二次歐洲大戰は不可避であつた。その由つて來るところは一朝一夕の問題ではなかつた。ヴェルサイユ條約以來實に二十餘年間における複雑なる國際事情の變動を理解せしめ、今次大戰の眞相を捕捉せしめんが

ために、本書は外務省情報部によつて編述せられたのである。

本書は四篇から成り、第一篇はヴェルサイユからチエッコの崩壊に至るまで、第二篇ではバルカンの形勢と獨伊同盟並にダンチヒ問題等、第三篇は獨ソ不可侵條約の成立から大戰勃發並にソ聯の動等、第四篇では列強の外交・經濟・軍備並に日本の立場等について説述してゐる。難解な外交問題をかゝる小冊子に、平易に、一般人の理解に供するために書かれた情報部員諸氏の勞を多としなければならぬ。我々はこの書によつて一通り今次歐洲大戰の経緯を理解し、日本の立場・態度の據るべきところを知ることが出來よう。青年諸君にもまことに手頃な解説書としてお奨めする。

東亞民族論

高田保馬 著

四六判 二二七頁 一・五〇 岩波書店

稀に見る情熱的な學者として知られる高田博士が烈々たる愛國の念に促されて書かれた書である。十一篇の主な論文と餘論一篇とからなつてゐる。一々の論文の内容については省くが、主旨は要するに一般に民族を成立せしめる紐帶たる同血、同文、同域等の諸條件が（強さに於ては著しく程度の差はあるにしても）少くとも潜在的のものとしては東亞各民族の共同の地盤として既に興へられてゐるのであつて、この地盤の上に東亞民族を一體の意識にまでもたすための工作、殊に政治的工作が行はなくてはならぬとするのである。さてこの結合によつて到來せられる中心の目標は東亞のための東亞の自衛である。この場合、日本民族

支那民族等々の個有の意味における民族そのものが結合して東亞民族をなすのではない。成員たる各個人は一面に於て個有の民族に屬すると同時に東亞民族に屬するのである。従つて日本民族はどこまでも日本民族として存続するのであり、日本精神が東亞精神に從屬するのでは無論ない。

右が本書の要旨である。東亞新秩序の建設は支那事變處理の不動の國策である。日本國民は總てその分に應じてこの國策に協力しなければならない。この秋、本書の如きは正に貴重な一貢獻として國民の一讀の要あるものである。

支 那 人

東京日日新聞社編
大阪毎日新聞社編

四六判 二七九頁 一・三〇
東京日日新聞社
大阪毎日新聞社

本書は支那問題の權威者に夫々その得意とする問題について執筆を煩はし、東日・大毎兩新聞に連載したものを纏めて一冊にしたものである。

内容は、第二「家族制度と革命」(村上知行)、第二「美點・缺點」(村上知行)、第三「民族性と共產主義」(藤井晋三郎)、第四「政治外交の性格」(吉岡文六)、第五「民族性論」(小竹文夫)、第六「農村・農民」(天野元之助・小竹文夫)、第七「租界」(植田捷雄)、第八「女」(米内山庸夫)、第九「抗戰に現れた支那人」(田中香苗)、第十「支那の知識階級」(原勝)、第十一「現代支那インテリの特徴」(岳廷棟)の十一篇である。

本書は複雑多變なりと稱せられる支那人を種々の角度より検討したものととして、支那人を理解する上に多大の參考となるものである。

日 本 の 社 會 事 業

中央社會事業協會編

菊判 二二一頁 〇・五〇 中央社會事業協會

遠く推古天皇の御代、聖德太子が難波に四天王寺を建立し、敬田、療病、施藥、悲田の四院を構へさせられて一切の男女無縁の病者、貧困者、無頼の徒を救養し給ふたことを諸君は知つて居られるであらう。更に光明皇后の御事績、淳仁天皇、淳和天皇が窮民を恤み給ふたことなどは歴史上著名な事である。この様に我邦の社會事業は皇室の御仁慈を源として發展し來つたことは、あらゆる他の諸國と趣を異にしてゐるのである。

この本は我邦に於ける社會事業の概況を紹介しようとしたもので、最初に簡單ではあるが、この事業の歴史を述べ、次に近時に於ける社會事業の對象、その對象に對する事業の現状が記されてある。

近年に於ける世界各國の社會事業はその對象を貧困と疾病と犯罪とにもつて行つてゐるが、推古の御代聖德太子の設け給ふた四院も、療病、施藥は共に疾病に對するもので、悲田院は貧困の者及び無頼の徒を寄住せしめて救養する機關であり、千三百年の昔から太子は近世に於けると同じ原則を以てこの事業に臨まれてゐたのである。唯近時は社會の事情も千三百年の昔とは異り、極めて複雑多岐になり來つてゐるので、之に

對する社會事業の諸設備は大いに異つて來てゐるのは當然で、その現狀についてはこの本にも可也詳細に説明されてある。

結局この本は讀んで楽しむ本ではなく、或は之によつて教養を高めると云ふものでもない。同胞の中にこの様にして救養しなければならぬ不幸な人々の居ることを知らしめると共に、この方面の事業に關與せらるゝ人に對して一應この事業の概觀を知らしめると云ふ點で恰好なものである。

統制經濟講話

波多野 鼎 著

四六判 三〇八頁 一・六〇 日本評論社

本書は支那事變の完遂、國防經濟の確立、東亞新秩序の建設等の必要上、微細に亘つて行はれるに至つた我國の經濟統制の全貌を理解せしめ、國策への協力において誤なきを期せんがために著はされたものであつて、内容は、我國統制經濟の特性とその目標より立論して、「生産力擴充問題」を資金の統制、資材の統制、労働の統制、積極的助成政策といふ四章に分けて取扱ひ、「輸入力増大問題」を貿易の統制、爲替統制と金融策の二章において論じ、「物價統制」を價格の抑制、價格の形成に二分して論究し、最後に公債消化政策について極めて組織的に、具體的に、簡潔明快に敘説してゐるのである。

著者の學風は理論的で實證的なことを特色としてゐるのであるが、本書にもそれがよく現はれてゐる。單なる解説書に止まるものではなく、政策の實際を簡明に、具體的に説明してくれると共に、それが何處に不備缺陷があり、どういふ問題が発生してをり、どういふ方向に向ひつゝあるものであるかをも示してくれるのである。

さきに同著者の『經濟講話』を推薦したが、本書はそれと姉妹篇の關係にあり、内容においても連絡があり、彼此補充的關係にあるから、併讀されるならば理解を深めるに一層役立つであらうと、著者は「序文」で述べてゐる。指導者諸氏は是非讀むべきであるし、青年諸君にも理解することが出來ようと思ふ。

世界の空軍（その現勢及び將來）

中原 稔 著

四六判 二二八頁 一・七〇 東苑書房

列強空軍の現勢を述べて、その將來の發展方向を暗示しようとするものである。最初に總論的に軍用としての飛行機の性能について概説せられてあるが、主たる部分は空軍戰略の元祖と云はれる伊太利のドゥーエ將軍の空軍論從つて伊太利の空軍から筆が起されてある。ドゥーエ將軍は歐洲大戰を中心としてその後に亘つて伊太利空軍の基礎を築いた人で今から十年前に死去してゐるが、今日では空軍に於けるクラウゼヅイツと迄稱せらるゝ程著名である。（クラウゼイツは十九世紀に於けるプロシヤ第一流の理論戰術家）世界の空軍の發展は實にこのドゥーエ將軍から發するもので、歐洲大戰後近代戰に於ける自國防衛上眞先にドゥーエ將軍の空軍論に刺戟されたのが英國である。従つて伊太利の次に英國の空軍戰略、それからロシア、アメリカ、フランス、最後に大ドイツ國空軍としてナチスの飛行團と云ふ順で叙述されてある。終に列

國軍用機の展望と云ふ一章があるが、こゝでは主として列強の戦闘機、爆撃機、攻撃機等専ら軍用機の機種に就いて説明されて居り幾分技術的であるが簡單である爲さ程むづかしいものではない。著者の跋文によれば内容はすべて外國の信用ある圖書雜誌からの拔萃の由で、書き方は平易である。著者は陸軍航空士官學校教授。

歴史・傳記・地誌

皇國二千六百年史

藤谷みさを著

四六判 二二〇頁 〇・六五 東京日日新聞社

紀元二千六百年の佳歳に贈るべき記念事業の一つとして、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社が懸賞を以て廣く天下に皇國二千六百年の歴史を求めたのに對して、全國より二百七十四篇の應募があつたが、これより辻善之助、山田孝雄、幸田露伴、西田直二郎、中村直勝、徳富蘇峰、菊池寛の諸權威が嚴選して本書が選ばれたのである。史書は數多く、専門家の手に成る日本歴史の研究書も決して少くない。通俗的な日本史或は教科書の類も随分あるが、本書はこれ等とは異り、専門史家にあらざる一女性が日本國民の熱情をもつてわが民族生活の發展を眺め、書き綴つた生きた歴史である。

建國二千六百年の昔より、わが國は興隆に興隆を重ねて、歴史は隆替するといふ言葉の誤りを證明してゐる。わが歴史にも又幾何かの不祥なる事件がないでもなかつたやうである。然し一度外夷に向つて立ち上る時、國民の團結力の強さはその類を見ざるものである。されば今次事變も既に第三年を迎へて皇師は支那大陸に堅陣を固めて微動だもせず、銃後の國民又愈々その團結を堅くしてその職場に努力しつゝある。かゝる時光輝ある二千六百年の歴史を繙き、日本民族發展の跡を辿るは大いなる意義あることである。そしてこの要求に應ずるべく生れ出た本書こそ國民の各人に敢て推薦すべきものであらう。

滿洲建國讀本

徳富蘇峰著

菊判 二九六頁 一・二〇 日本電報通信社

わが帝國は本年二月十一日光輝ある紀元二千六百年の紀元節を迎へ、隆々たる國運の躍進は實に眼醒しきものである。然るにわが帝國と一徳一心不可分の關係にある盟邦滿洲帝國も早くも来る三月一日を以て建國八周年を迎へることゝなつた。こゝに滿洲建國の八年前に遡り、その建國の理想を明らかにし、その意義を述べ、帝國との深い關係を説くのは、兩國相提携して東亞新秩序の建設に邁進するの秋、最も意義深き企てといふべきであらう。本書は「滿洲建國と其の理想」の外九章に分つて、滿洲建國よりその現況に及び、更に大和民族の大移動を述べ、蒙疆の獨立自治を論じてゐる。もとより達意の名文を以て知られたる蘇峰の執筆にかゝるもの故に極めて平易明快に讀むことが出来る。

支那文化史觀

出石 誠彦 著

特小判 一九八頁〇・五〇 日本放送出版協會

昨年の秋著者は放送局の依頼に依つて「物語支那文化史」と云ふ講座を擔當されたが、本書はこの講座を上梓したものであつて、すべて五十五講に分たれてある。

第一講から第三講迄は、東亞の風土と民族、民族勢力の消長、王朝の興亡と云ふ題目で支那大陸の風土、その風土の上に生ひ立つた民族の消長、その民族に依つて出来上つた王朝の歴史が總論的に述べられてある。この三つの講義はどちらかと云へば僅かの頁にあらゆる出来事押し込めたと云ふ少々煩はしい感じがしないわけでもない。だが本書の構成上總論的なこの三つの講義は除くわけには行かないと思ふ。第四講以下は支那文化史上の特殊な主題を取上げて、その各々について簡單ではあるが説明がしてある。例へば支那文化の發祥と云ふ題では支那文化を考古學的に考究し、龜の甲や獸の骨に刻まれたと云ふ例の甲骨文について述べてある。或は上代支那の敬天思想、支那の民族生活上の二大災厄である旱魃と洪水について、支那の政治經濟組織の特質等々、その他支那文化と佛教との關係、支那思想の展望などが主要な題目となつてゐる。そして之等の問題を大體問題の起つた時代の順に説明し、終に近世に至つて東洋に伸びて來た歐洲列強の勢力との關係、清朝末期に於ける新舊思想の對立と云ふ様な近代的な主題に迄及んでゐる。元來がラヂオの講座であるから行文平明で読み易く、主題本位であるからその主題についての感銘も深い、分量から云つても諸君にお薦めして丁度手頃であると思ふ。

野口英世

小泉 丹 著

新四六判 一八七頁〇・五〇 岩波書店

猪苗代湖畔の一寒村に貧農の子として生れながら、その天才的な頭腦と不屈不撓の意志力を以て、世界の野口と唱はれるに至るまでの野口英世の生涯を傳へたものである。然し乍らこの傳記は必ずしもありふれた立志傳や、又わざとらしい訓話的なものではない。又徒らにその業績を賞揚し、讚歎したものでもない。寧ろ學者としての野口、人間としての野口を具さに吟味したものである。従つていかにも親しみのある、我々に近い一人の人間として描かれてゐる。然しこのことは決して彼の偉大さを損傷するものではない。何故ならば、當時の紐育タイムスの述べたが如く、彼は人類の眞の敵との戦ひにその一生を捧げた人類の恩人であるからである。尙ほ本書には彼の母、師友について述べられてゐる。野口博士の偉大さは固よりであるが、然し彼を世界の野口にまで育てあげたのは必ずしも彼一個人の力のみではない。彼の周圍にあつた幾人かの人達の温かい心が與つて力あるのである。その生涯を貧苦の中に終始し、世界的偉人をその子として持ち乍ら、なほ湖畔の農村に安住して出でなかつた美しい魂の持主である母親や、少年時代の小林先生、青年時代の渡部ドクトル、東京時代の血脇先生、その他の友情に富んだ知友達の肉親に劣らぬ恩愛がよく傳へられてゐる。

野口英世傳として本書は最も手頃なものであり、優れた内容を有してゐる。青年諸君の座右に置いて深い示唆に富んだ一本であらう。

郡 司 大 尉

廣 瀨 彦 太 著

四六判 三五二頁 一・八〇 鱒書房

ロシアのシベリア經營による東方への進出はピーター大帝以來のロシアの政策であり、今もなほこの政策が遵守されてゐることは云ふまでもない。ロシアは常にわが國の北邊に蟠居して炯々たる眼を光らせつゝ機會到來を待機してゐる。特に日露戰爭以前に於てロシアの艦船がわが千島列島附近に出没したのは必ずしも兩三回のことではなかつた。この時にあたつて北洋の拓殖を叫んで起つたのは郡司大尉である。大尉は千島の確保と、拓殖防備の完成を目的として同志を糾合し、短艇によつて墨田川を出發して、不屈の意志力を以て占守島に達した。日露開戦のために大尉の事業は必ずしも成功したとは云ひ得ないが、然し大尉の熱烈なる愛國の至情とその壯舉は永久に國民の胸に刻みつけられるべきものである。日本の大陸進出により日露は國境を接し繰返して紛争を醸しつゝあるが、北洋の問題も又刻下の重要問題であらう。青年諸君が明治のこの先覺者について知ることは決して徒爾ではあるまい。

昭和の軍神 西 住 戰 車 長

菊 池 寬 著

四六判 四三四頁 二・〇〇 東京日日新聞社

昭和の軍神西住戰車長は餘りにも有名であつて國民としてその人となりと壯烈なる最後を就いて知らざるものは恐らくあるまい。又大尉の傳記も既に數冊刊行されてゐるやうである。然も本書の右に出づるものはないと云ふも敢て過言ではない。それは本書が單に國民の渴仰する軍神の姿を逸早く傳へて、國民の好奇心を満足させるのを目的としたものでなく、周到なる用意を以て執筆した傳記であつて、一氣呵成に書きあげられた際物でない所に價值がある。菊池寛氏は本書執筆のため、親しく大尉の郷里を訪ね、又大陸のその戦蹟を踏査し、又大尉の先輩、同僚、部下に訊ね、あまねく資料を蒐集、しかる後始めてその筆を下ろしたのである。「私はいろ／＼な文献や談話筆記を採擷するに就いて、少しの誇張も修辭も加へなかつた」と著者は書いてゐるが、この態度こそこの近代的英雄を傳へるに最も適當なる方法と云ふべきであらう。内容は「發端」「その人となり」「その生立と家庭」「戦歴」「戦死」の順序によつてゐる。この典型的な武人の生涯は青年諸君にとつて大いなる感動を與へるものであると信ずる。それは所謂英雄偉人の如き端倪すべからざるものではなく、我々にとつてもつて範とするに容易である所の一人物の傳記であるからである。

空の英雄 藤 田 雄 藏 中 佐

森 川 肇 著

四六判 二〇四頁 一・〇〇 清教社

昭和十三年五月航空研究所の長距離試作機が藤田少佐、高橋曹長、關根機關士の三氏によつて操縦され、初夏の薰風を截つて關東の空を銚子、足利、平塚と三點を結んで周回すること廿九回、輝く世界記録を樹立したことは我々の記憶に尙ほ新たなところである。地方の青年諸君は直接その勇姿を見られなかつたが、そ

の眞紅の翼を擴げた世紀の驚異の悠々たる飛行振りは全く見事なものであつた。そして空の至寶藤田の名は全國民の腦裡に刻みこまれた。越えて翌十四年五月突如、陸軍省から藤田中佐が二月一日中支戦線沙洋鎮に於て壯烈なる戦死を遂げたことが發表され、わが朝野を擧げて痛恨哀悼の聲が翕然として湧き起つたのである。本書は不滅の功績を残して惜しくも逝いた中佐の生涯を傳へたもので、その中學時代より筆を起し、士官學校時代、砲兵士官時代、航空科への轉籍、滿洲事變時代、テスト・パイロット時代、航研機による世界記録の樹立、藤田中佐の戦死の各章に亘つてゐる。中佐は徹頭徹尾飛行人間であつた。既に中學生にしてグライダーを自ら製作して飛び、軍人としては飛行將校として縦横に大空を翔破した。その飛行機に對する熱情と操縦に於ける沈着は中佐をして衆を抜いて名パイロットたらしめたものである。本書はよくその全貌を傳へて餘すところがない。

福山 航空兵大尉

野口 昂 著

四六判 四六八頁 一・四〇 中央公論社

歸徳上空に於て敵機の大編隊群との遭遇戦に右腕と左膝を貫通され、操縦桿を口に啞へ辛うじて操縦を續け、一時間の航程を愛機を導いて基地に歸還したる後陣歿した福山大尉の鬼神を哭かしむる壯烈なる最後は、世界中戦史上いまだ嘗つて前例なき不撓不屈の精神力を示した超人間的神技として不滅の一片を留めたものである。その眞相は當時新聞、雑誌、ラヂオが擧つて報道し、畏くもその愛機は天覽を辱うするに至つた。本書は一兵卒より身を起して不滅の勳を留めた大尉の傳記であるが、就中その青年時代熊野の電氣會社に勤務せる時の他人の企及し得ざる活躍振りを始めとし、大尉自身の執筆せる兵隊日記、航空日記は青年諸君に深い感銘を與へるものである。

戦歿將士陣中だより

東京日日新聞社學藝部編

四六判 四〇九頁 〇・八五 東京日日新聞社

支那大陸の原野に或は山岳に轉戦する皇軍將兵が僅かの憩ひの時間を割いて書き綴つた、家郷への通信を一卷に収録したものである。草むす屍大君の邊にこそ死なぬ、祖國のために命を捧げて顧みることのない忠勇な將兵達の至情は固よりたゞ一つの同じきものであるが、その家郷に於ける時の生活は千差萬別であるに違ひない。さればその家郷への通信には數々の讀む者の心を打つものが含まれてゐることであらう。地方の青年諸君は餘り知られぬかと思ふがドイツ戦歿學生の手紙を収録したものが翻譯されて多くの讀者を感動させたことがある。戦場に馳驅して、たゞ一筋の純粹な氣持から生れ出たものが人の心を深く貫ぬくものゝあるのは云ふまでもないことである。本書の上梓はその意味で非常に意義のあるものである。皇軍の將兵がどんな氣持で戦争をしてゐるか、それが最も偽りなしに表現されてゐるのがこの陣中だよりである。本書は文部省でも推薦圖書になつてゐる。

澁澤榮一傳

幸田露伴著

四六判 三一七頁 一・五〇 岩波書店

本書は幸田露伴氏の筆になる澁澤榮一傳である。本書で取扱つてゐるのは、榮一が三十四歳大藏省退官に至るまでの時期に屬し、それ以後は單にプログラム程度の記述を附加したに過ぎない。それ故、彼の九十年の長い生涯から見れば半生の傳にも満たないものではあるが、いはゞ青年澁澤榮一傳として立派に獨立の意をもつものである。

本書の叙述は露伴氏一流の傳記體であつて、立體的のものである。榮一の成長・發展を丸彫に表現しようとしてゐる。著者によれば、彼はまさしく時代の子であり、時代と共に成長した人物である。それ故、彼の事績・功業は時代の轉變・推移の過程の中に語られ、彼の人物・性行等もそれらの事實を語る中に顯現するのである。また時々著者の史觀・人物觀を間にはさみ、それがまた一流の史傳として光彩を放つものとなつてゐる。著者の探究は微細に亘り、史眼透徹して、優に史家を啓發するに足るものがある。

青年諸君にはすこし難しいかも知れないが、難讀の間にも云ひ難い滋味を味ひ、教養の上にも幾多貴重な示唆を得ることが出來ようと思ふ。

洋

車

須田皖次著

四六判 一六六頁 一・二〇 古今書院

本書は現在福岡氣象臺長たる著者が昭和十三年九月から昭和十四年四月に至る八ヶ月間の北中支蒙疆等の

各地に旅行した際得た見聞を「北支雜記」として雜誌「地理學」誌上に載せた六十六篇を單行本に纏めたものである。その内容は「北京の日本人」「洋車」「北京の澡堂」「北京の古本屋」「北京の物資」「北京の通貨」の題が示す如く北京に於ける日本人、支那人の日常生活を紹介したものが多く、中にも北支蒙疆の自然と人とに密接不離な關係のある面白い事象を卑近な實生活に即して取上げた點に著者の氣象學者、地理學者らしい觀察眼の躍如たるものが窺はれる。もとより旅行の途次忽々の間になつたものであるから、深い研究調査の成果と異り、支那の研究者或は一度彼の地に遊んだことのある者にとつては嫌らぬ點が多いであらうが平易輕妙な記述の中に自づと北支蒙疆の風土・支那人の國民性等の一端を知らしめる輕い讀物として推薦する。

體育・衛生

健康の醫學上、下

日本放送協會編

特小判 二册 各〇・五〇 日本放送出版協會

昨年の夏、フヂオに健康講座が開設せられ、あらゆる角度からそれ／＼の専門家を煩はして、健康保持のため一般國民の心得べきことが放送されたが、本書はその時の放送を集録したものである。内容は左の如きである。

上卷 夏の生活と衣服の衛生(厚生省技師醫博・入鹿山勝郎)、健康増進法としてのスポーツ(厚生省體育官醫博・野津謙)、温泉と健康増進(東大教授醫博・三澤敬義)、夏の傳染病の豫防と注意(警視廳防疫課長醫博・井口乘海)、頭の健康法(慶大教授醫博・植松七九郎)、呼吸器の健康法(東京市療養所醫博・春木秀次郎)、耳と鼻の健康法(同愛病院醫博・細谷雄太)、咽喉の健康法(泉橋病院醫博・吉田三郎)、眼の健康法(東大助教醫博・桐澤長徳)、心臓の健康法(東大講師醫博・板倉武)、胃腸の健康法(慈惠醫大助教教授醫博・平松鶴吉)

下卷 刺戟性嗜好品と保健(東京市衛生試験所長醫博・石原房雄)、働く人と工場衛生(厚生省技師醫博・古屋芳雄)、働く人の疲労と休息(日本労働科學研究所長醫博・暉峻義等)、複雑なる仕事をやる人の健康法(高峰能率研究所長醫博・高峰博)、働く人の榮養と健康増進(保険院技師醫博・引地亮太郎)、働く婦人と少年の健康法(保険院施設課長醫博・佐藤正)、職業病と其豫防(厚生省技師醫博・大西清治)、東洋先哲の健康法(日大教授醫博・内山孝一)、老人の健康増進法について(慶大教授醫博・大森憲太)、灸による健康増進法(醫博・伊藤是)

灸の醫學的効果

田中 恭平 著

四六判 三四頁 一・二〇 日本青年館

日本醫學の最も特色ある治療法の一つである灸に關する總括的な著書である。最初に灸の科學的の基礎づ

けがあり、こゝでは専ら西洋醫學と日本醫學とを比較検討して日本醫學に軍配を擧げて居るが、この結論には若干科學性を缺いてゐる處があり、本書の中では餘り重要な役割を持つてゐない。この本として最も重要な部分は灸醫術の實際を取り扱つた部分で、經穴即ち灸點或は俗にお灸の壺と云はるゝ點の研究、もぐさの研究その他多くの治療例で、分量から云つても本書の過半を占めてゐる。灸醫術の一つの特徴は比較的容易に各家庭で行へると云ふことで、これが灸術師と云ふ特殊な技術家の手に依らなければ絶対に出來ないと云ふものならば本書を推薦する理由が少い。尤もこの本を一冊讀んだからとて直ちに灸が自由に据えられると云ふものではなく充分の技術を得る迄には相當の努力と日數を要することは云ふ迄もないが、少くとも本書に依つて灸醫術への入門とすることが出來、ひいては洋醫萬能の今日、本書の様な特殊な書物に依つて我國本來の皇漢醫學への反省が出來ればこの上もないことである。

科學

おはなし電氣學

佐野 昌一 著

四六判 四八六頁 二・三〇 科學知識普及會

我々の日常生活に關係の深い方面を主として、電氣工學の一般を平易に述べたものである。全部で四十七

と云ふ多數に内容が分けてあるが、之は要するに「おはなし電氣學」で、話題中心に平易に述べたが爲であると思はれる。

最初に電子の話、電氣入門、直流交流の話、電磁氣の話と云ふ様な所があるが、こゝで大體電氣工學の最も基本になる原理がお話の形で説明されてある。それからしばらくは電氣を作る發電の話がつゞき、いよいよ電氣が出来ると、之を家の中に引き入れて電燈となる話、並に之と關連して電球の話、次は少し方面を變へて我々の日常生活に電燈の次になくはならぬ電車の話、電話の話、それから少し高級になつてラヂオの話、従つて之に附隨して熱電子とか真空管とか電波とかに關する話もしてある。それからトーキーを経て最後は目下話題の中心であるテレビジョンの話に及んでゐる。

おはなし電氣學と云つても、小説や所謂通俗ものを讀むやうには樂に讀めるものではない。この本を讀む人は兎に角一應電氣のことを知つて見度いと云ふ欲求がなければいけない。その様な欲求を持つた人であれば特別の豫備知識なしに可成高級な電氣理論が、或は電氣に關する諸知識が本書に依つて平易に與へられると思ふ。著者は電氣學の専門家でもあるが、又海野十三と云ふペンネームに依つて探偵小説界の新人でもある。従つて文章は分りよく又仲間面白い。

トンネルの話

アーチバルト・ブラツク著
平山復二郎譯
四六判 二五四頁 一・六〇 岩波書店

この本は素人を目標として世界各國のトンネルの歴史を書いた科學讀みものである。序を見ると、實は著

者のブラツクと云ふ人自身は別段トンネルの方の専門家ではないらしい。それにも係らずこの本が仲々すぐれたよい本で、文部省の推薦圖書にもなつてゐるのは、この著者の兄弟の一人が米國では立派な技師であるため、その技師やらその他幾人かの専門家の助力に依つて出来たものであるためらしい。

その内容はギリシヤやエジプトの古代のトンネルから始めて、西洋歴史では暗黒時代と稱せられる紀元五世紀頃から十世紀頃までのトンネル、それから新しい時代になつてからは米國のトンネル、アルプスの大トンネル、變つた所では英國の水底トンネル、米國のハドソントンネル、同じく米國の瓦斯管トンネル、パリやベルリンの地下鐵、シカゴの貨物用地下鐵、米國の灌漑用トンネル、イギリス海峽の未完成のまゝのトンネル、等々、そしてその中にまじつて我が丹那、清水トンネル等の工事の事實と逸話を集めたものである。一般の讀者が非常な興味を以てトンネル工事並に之に關連した科學的敘述を讀むうちに、不知不識の中にトンネル工學の概要を知らしめようと云ふ仕組みの洵に特色のある科學讀みものである。

野生動物記

ヘステインクス著
内山賢次譯
四六判 四〇二頁 二・〇〇 三笠書房

野生動物の生活はよく觀察すればする程浪漫的なものである。その意味で野生動物の記録は浪漫的な少年期青年期にある人々に最も多く喜ばれる。

この本は従兄弟同志であるジャックとエドワードと云ふ二人のハイスクールの生徒（日本で云へば中學の

上級生徒)が、動物學者で、そして彼等の伯父さんであるハミルトンと云ふ博士に連れられて、それにハミルトン博士の旅行にはいつもお供をすると云ふネートと云ふ獵人が加はり、四人で米大陸とアフリカの一部のあちこちを野生動物を追ふて旅行をしながら、伯父博士から野生動物の生態とその習性を教はると云ふ形式の物語りになつてゐる。出て来る野生動物はどれも米大陸とアフリカ大陸のもので、日本では見られないものもあるが、野生動物と云ふ大きな視野から見ると日本の野生動物とも極めて似通つた習性も見出され又中には勿論日本にも棲息するものもあり、仲々面白く讀まれる。そしてその面白い中に與へられる野生動物に關する多くの知識は、之亦仲々に正確なものである。又この本には多數の挿繪が入れてあるが、之が見たこともない野生動物の姿を示して呉れて、本書を讀む上に大きな助けとなつてゐる。

天文と宇宙 改訂版

荒木俊馬 著

四六判 四九三頁 三・八〇 恒星社

この本の初版は昭和十二年に出版せられ、同じ年この目録にも推薦された筈である。今回の改訂版は重複した箇所、題材の古いものゝ削除、その代りに新しいものゝ挿入などに依つて結局前版に比して約百五十頁の増加である。前版の紹介文を讀まなかつた人々の爲に簡単に内容を説明して見る。

内容は全卷八篇に分たれてゐるが、第一篇では天文學の起源が説かれてある。この時に、特に讀者が東洋人であると云ふ立場から、その材料を主として東洋に採つてゐるのは喜ばしい。之と併行して次に述べられ

る處は西洋の天文學の歴史であつて、之は當然である。大體十九世紀迄が扱はれてゐる。それから以後は主として問題の焦點が宇宙論に偏つてゐる。例へば現代の宇宙觀、星辰進化の問題、宇宙講造論等。

著者は序文に本書は通俗天文書であると云つて居られるが、通俗書と云つても所謂通俗書ではなく、天文同好の人々の爲に著されたもので、寝ころんで讀める體のものではない。と云つても決して學術的の専門書で讀んでも分らぬと云ふのではなく、何等の豫備知識を有たない讀者でも興味深く讀める稍々高級な通俗書である。之に依つて宇宙に對する新らしい目を開くことも出來ようし、科學の歴史の一部分を見ることが出来る。上品な趣味を養ふと云ふ意味で諸君に一讀を薦め度い。著者は京都帝大助教授で理學博士。

文學・藝術

花と兵隊

火野葦平 著

四六判 二七〇頁 一・〇〇 改造社

著者が先に發表した「麥と兵隊」「土と兵隊」と併せて三部作をなすもので、嘗て「朝日新聞」に連載されて好評を博したものである。前二者が生々しい戰鬪を寫したのに對して、これは杭州に於けるわが警備兵の生活を描いてゐる。こゝに描かれてゐる一團の兵隊は杭州灣に敵前上陸をなし、嘉善を抜き、南京まで長驅

した人達である。それは「土と兵隊」に迫力を以て描寫されてゐる。その後、彼等は杭州の警備を命ぜられ、嘗て彼等が幾度か死闘を繰返した戦蹟を逆行して杭州へ入る。時は既に歳末に近く、杭州の市街は雪に埋められてゐる。なほ便衣隊が出没するとは云へ、此處に駐屯した彼等一團の兵隊の、激しい戦闘を體驗した後の、今は心の落ち着きを得た生活が、暖かい、しみじみとした筆致で書かれてゐる。兵隊達の友情や、異郷に迎へる新年の喜び等は、讀者に深いしみじみとした感動を與へるであらう。なほかうした一面に、杭州の眼醒しい復興振りや、駐屯軍と市民との間に結ばれる交渉や相互の理解が、和やかな、いさゝかユーモアをこめた筆致で書かれてゐる。

従軍小説は戦闘の記録を描いたものが多いが、本書の如く駐屯軍の生活や、これを圍む支那人の生活を書いた優れた作品の出たことは喜ばしいことである。

山 ゆ か ば

山 本 和 夫 著

四六判 三六五頁 一・五〇 河出書房

武漢三鎮の攻略戦は既に多くの筆者によつて書かれてゐるが、本書はその中の優れたものゝ一つである。著者は詩人として知られてゐるが、その一度應召するや、詩筆を銃劍と換へ、揚子江南岸を前進する〇〇部隊の一兵として、身を砲火に曝して顧みるところがなかつた。然しこの多感なる詩人は死生の巷にあつても固より詩を忘れ去ることはなかつた。その尊い體驗はその優れた詩筆を通して紙上に躍如として再現されたのである。従軍記と云ふものは如何に稚拙に表現されてゐても、その内容の眞實さの故に必ずや讀者の心をうたずにはをかかないものである。ましてや多感な詩人が描きあげたこの見事な記録がどんなに我々を感動させるかは蓋し云ふまでもないことである。我々は著者と共に親しく戦場にあつて、戦闘に身を挺する思ひがするのである。「山ゆかば」……それは「草むす屍大君の邊にこそ死なぬ」の歌から採つたものであらう。げにや著者が参加した一團の將兵は山をゆき、草を分け、湖沼を渡渉して、前進につぐ前進をもつてしたのであらう。祖國のために身を捧げて顧みることのない著者の誠は凝つてこの一卷をなしたのである。

吳 淞 ク リ ー ク

日 比 野 士 朗 著

四六判 二八五頁 一・〇〇 中央公論社

吳淞クリークの名はわが國民の胸に灼くやうなものを感じさせずにはをかかないであらう。吳淞クリークは皇軍の將兵からいかに多くの貴重な犠牲を要求したことであらう。こゝに展開された戦闘がいかに激しいものであつたかは當時幾度か報道されたところである。そして今やその戦闘がこれに参加した作家によつて物の見事に作品として描寫されたのである。その息室るが如き渡河戦の凄じさが、澄み切つた作家の心眼を通して再現されてゐる。戦闘といふものがどんな姿のものであるかは數多い従軍記の中で本書が最もよく傳へてゐるのではないかと思ふ。

著者の特徴はその筆致がいかに淡々としてをり、さり氣ないところにある。著者は決して誇張した文字

を使はない。そしてかうした素直な文章の底から戦闘の眞實さが浮きあがつて來るのである。本書は「召集令狀」「出帆」「吳淞クリーク」「野戦病院」の四篇からなる一聯の小説集である。恐らく著者自身の體驗を書いたものであらう。應召から戦闘に傷いて野戦病院に收容されるまでが刻明に描かれてゐる。特に終りの二篇が優れてゐる。「吳淞クリーク」はいま述べたが「野戦病院」に描寫されてゐる將兵の生活は惻々として心に泌みるものがある。火野葦平、上田廣と並んで戦争文學の最も優れた三人として指を折られるのも首肯することが出来る。

分隊長の手記

棟田博著

四六判 二九五頁 一・三〇 新小説社

本書は赤柴部隊に屬して北支に轉戦し、不幸戦傷歸還の身となつた棟田伍長の戦線手記である。陵縣より出發し、馬腰塢の戦、火坊莊を経て濟南に入城し、轉じて德縣における後方勤務に至るまでの記録八篇より成つてゐる。戦闘を描き、行軍を描き、戦線における兵隊の生活を描いてゐることは他の「兵隊もの」と同様であるが、本書は尋常一様の「兵隊もの」ではなく、戦線における兵隊の日常生活が如何にも生々と描き出されてゐる。本書には聊かもよそ行きらしいところがなく、極めて正直に、素樸に、實に明朗に活寫されてゐる。兵隊が互に助けあひ、勵ましあひ、死にまさる辛苦を克服し、嬉々として戯れ、喜びあひ、また慰めあふ様が如何にも如實に描き出され、戦場における兵隊の生活はかくやと思はせるものがある。戦記文學の最高峰火野葦平氏の作品にも敢へて劣らない一面を備へたもので推薦の價値あるものである。諸君も時に涙を流し、時には思はず高笑しながら、感動に滿されて一氣に讀みをへることが出来る。

病院船

大嶽康子著

四六判 一八一頁 一・〇〇 女子文苑社

著者は赤十字の看護婦であり、平時は「文苑研究會」などに關係してゐる女性である。事變勃發と共に上海戦線に参加して、今は陸軍第一病院に勤務中である。

内容には「召集令」「征途」「野戦病院」「病院船」「第三次航海」「颱風」といふ見出しがつけられてゐるが全體が日記（昭和十二年七月二十九日から十一月二十日まで）として書かれてゐるものである。

本書は所謂文學的作品ではなく、著者が日々直面し體驗した非常の出來事を忠實に記録し、報告したものである。事實を素直に述べてゐる行間には自ら女性的な柔かな感情が滲み出てゐる。我々はこの本を讀んで戦争といふ巨大な事件の中に少く袂まれて押しつぶされやうとしながら、毅然として白衣の天使として國家の大使命を自覺し、弱い女性の肉體を自ら鞭ち一途に唯精神のみに生きる。その嚴肅な美しさに心撃たれるそしてかうした天使がゐてくれるといふことが、戦地の勇士や、父や兄を戦地に送つてゐる人々にとつて、どれだけ力強さを覺えしめることであらう。

聖 戰 歌 集

讀 賣 新 聞 社 編

四六判 三七頁 一・七〇 岡倉書房

本歌集は齋藤茂吉、佐々木信綱、北原白秋三氏選の下に讀賣新聞社歌壇に選載せられた支那事變に關する短歌千二百餘首を集録したものである。編輯は各選者別に三部に分れ、各部夫々「現地篇」「銃後篇」の二篇別になつてゐる。「現地篇」の出詠者は戦地軍人を始めとし、應召兵、戦病兵、歸還兵等を含み、「銃後篇」には出征兵の親類縁者、友人知人、一般人等あらゆる種類の人々が出詠し、尙歌も必ずしも戦争に關するものと限らず、廣く時局を詠じたものも含まれてゐる。

本集の第一輯ともいふべきものが昨年十月三省堂から出版され、すでにそれを諸君に推薦したのであつた本集では齋藤氏に代つた北原氏の選が加つてゐるから一層豊富で見榮えがある。併せ愛誦せられんことを希望する。

宮 本 武 藏

吉 川 英 治 著

四六判 全八卷 各一・〇〇 大日本雄辯會講談社

既に昭和十二年一月本目錄に於て推薦したものであるが、今回その普及版が刊行されつゝあるので敢て再録する次第である。餘りにも有名な小説であつて既に愛讀された青年諸君も數多いことと思ふ。單に興味深い物語と云ふのみではなく人間修養の上にも何等か参考になるものがある。現在第六卷まで刊行されてゐる

日 は 昇 る

相 馬 御 風 著

四六判 二四四頁 一・六〇 人文書院

昨年度に於て紹介した同じ著者の「土に祈る」に續くものである。糸魚川に定住して既に二十年、良寛の研究に没頭して、沈潜の心境に詩囊を養ひつゝある著者も、今次事變の勃發と共に、胸に愛國の血は迸り、幾多の詩にその至情を吐露してゐるが、本書も同じくさうした心境を盛つた作品に満たされた隨筆集である。「ヤマトココロ」或は「ニッポンの確立」等の諸章では、著者はわが國體の尊嚴を稱へ、家族國家としての日本の美しさを讃へてゐる。その銃後の農村を描いたものは幾多の涙ぐまじき愛國の物語となつてゐるが、その中にも特に著者の提唱にかゝり、今や全國に多數の共鳴者を得つゝある「一粒報國」「一握報告」について述べられた一章は我々に深い感銘を與へるものである。その他例の如く著者の心醉する良寛その他を述べた幾章かある。青年諸君の心の友として座右に備へらるべき隨筆集である。

わ が 人 生 と 宗 教

吉 田 絃 二 郎 著

四六判 三七二頁 一・三〇 第一書房

この著者は、今も變らずに武藏野の一角に、春ともなれば鶯の笛鳴きを樂しみ、冬さり來ればのじこの地なきに人の世の寂しさを味ひ、特に寒巖枯木の冬の空を愛して禪僧の心の世界に住んで居られる。この本はその様な生活から生れた人生思惟の書で、宗教とは何ぞやの問題に觸れた隨筆を集めたのである。であるか

ら表面静か過ぎる程静かな、だがその底を流るゝ清純さにはいつもながら愛着の念を禁じ得ない。
著者の生活こそは洵に禪僧のそれであるが、この本に現はれた思想は必ずしも佛教だけに偏つて居ない。
佛陀の教も説けばキリストの言葉も引く。聖僧隱者の諦悟も語れば又多分に西洋哲學の香もする。收められ
た。四十數篇悉く人生觀照ならざるはないが、それかと云つて修養書乃至は哲學書の堅さはなく、飽く迄文
學的の感想隨筆集であることは他の諸作と同様である。

土 と 戦 ふ

菅野 正 男 著

四六判 一六二頁 〇・五〇 滿洲移住協會

本書は滿蒙開拓青少年義勇軍の一訓練生が多忙の間に綴つた手記である。渡滿後約一年間の生活を時間的
な順序を追うて記述したものであるが、感想文の單なる羅列でなく、素朴ながらも小説的なまとまりをもつ
たものと云ふことが出来る。

遙か異郷の茫漠たる未開の曠野に於て感傷・郷愁や懷疑に惱まされながら、慣れぬ氣候・風土病・物資の
缺乏等と闘ひ、文字通り血のにおむやうな困苦を克服して、彼等の使命たる大陸開拓の第一歩を成功的に踏
出す感激にみちた有様がありのまゝに描き出されてゐる。

これは青年の手になつた記録である。視察者・傍觀者の立場からのものでなく、實に開拓に従事しつゝあ
る一青年の手になつたといふことに無限の價値と眞實とがあるのである。願くはすべての青年諸君の熱讀さ
れんことを希望する。

新洋樂夜話

太田 黒元 雄 著

四六判 四〇九頁 〇・七八 第一書房

近頃はラジオでも若い人々には西洋音樂が大變迎へられると云ふことであるが、本式の西洋音樂を聞くに
はやつぱり若干の準備が必要である。この本が西洋音樂理解の爲に最もよい指導書と云ふことは出来ないか
も知れないが、少くとも洋樂に對する興味を喚起せしむる爲には好恰なものである。内容は夜話と云ふ書名
にもふさわしく極めて樂な書きぶりで、全部で二十夜話に分つてある。第一夜から第三夜迄は西洋音樂發達
の歴史で主として十八世紀のバツハ、ヘンデル以後の近代音樂について發達の経路が語られてある。第四夜
以後は各國の國歌物語り、各種樂器の解説、管絃樂とか吹奏樂とか、歌劇、交響曲、室内樂等の構成の説明
大作曲家の逸話、各國音樂の國民性に基いた特徴等々が適當に區分されて物語られてある。

出て來る言葉や人名が、何れも西洋音樂に特有な術語や人名であるが、昔と違つて今日ではラジオや新聞
で大衆化されてゐるから、何人もこの本を讀んで取りつき難い専門書と思ふ人はないと思ふ。寧ろ單なる讀
物として見ても興味のあるものである。

産業

轉業指導講座

東京商工會議所編

四六判 二七六頁 一・六〇 昭和圖書株式會社

本書は、東京商工會議所が現下に於て緊要な轉業問題に關し、最も適切なる知識と方法とを普及せんが爲に、五日間に亘り、各方面の權威を招き、轉業指導講習會を開催し、轉業の必要に迫られてゐる實際中小商工業者を集めて講演したものを纏めて刊行したものである。全編が九講に分れ、官廳その他關係方面の専門家が各種の題目の下に、戰時統制經濟の必要と轉業問題發生の必然性並にそれが對策の主要を説くことから商工組合の組織と經營・共同設備・轉業資金・轉業體験談等凡そ轉業に關して重要な諸事項に就き、極めて平明に、懇切に講演したものである。その方面に精通せる専門家が、實際焦眉の急として差迫られてゐる業者に對する直接の指導講義であるから、生きて直接に役立つ著書であつて、現在この方面に關する指導書が殆どなく、世上の要求を充足し得ない状態にある時、本書は殆ど唯一の書として奨めるに足るものである。中小商工業關係の青年諸君並に指導者の方々も一讀して然るべきものである。

農村
營養

共同炊事の手引

森川規矩 共著
増田正直

四六判 二七六頁 一・〇〇 佐藤新興生活館

概して農民は食糧生産者の立場にありながら、その消費に對しては餘りにも無關心で、因習に因はれ粗食

多量主義で、夙に營養改善の急務なるを識者は認めてゐたのである。一方農繁期に於ける勞働力の不足は主婦の炊事を益々困難ならしめ、營養の質的悪化をも招くおそれがある。従つて營養を改善し、繁忙を極むる農業勞働に對して出来るだけ多くの勞働力を轉化補充すると云ふ意味で、農村の共同炊事が最も適切な方法であることも識者のひとしく唱へ來つたところである。更にこれを大きく見れば、生産力擴充、國民體位向上の資ともなり得るわけである。かくて本書の價值は何よりも先づ標題であるところの共同炊事の意義、その重要性にある。

内容は前編營養改善の基礎知識と、後編共同炊事の實際とより成り、更に附録として實驗濟農繁期營養食共同炊事獻立百例及び農繁期託兒所用獻立を載せてゐる。

青年諸君並に指導者諸氏もこの方面に關心を寄せられ、一應の知識を得られることを必要と信じ、お奨めする次第である。

時局農村の副業と工業

農林省副業課編

四六判 四〇九頁 三・〇〇 西ヶ原刊行會

先年農林省が奨励金を交附してその發達を促した農村工業及び副業の中主要なるもの二十一種を選んで夫々の専門家に依囑して執筆せしめたものである。その主なる内容は本書を四篇に分ち、第一篇農産關係に於ては、漬物菜種油・藁製品・桑條の利用・眞綿・澱粉・製粉・製麵・醬油・罐詰、第二篇畜産關係に於ては

軍用兎・アンゴラ兎罐詰肉・乾燥肉、第三篇林産關係に於ては、松脂・五倍子・輸出向木製玩具・竹工品・曹達パルプ、第四篇水産關係に於ては、寒天・昆布・和布・艦加工品を取扱つてゐる。その説明の仕方は、各種の産物について性質・用途・年産額・主要産地・貿易關係等の概説を致し、各論に於て製法並に製造に要する器具機械・荷造法・貯藏法・販路・販賣價格に至るまで一々詳細に具體的に教示したものであつて、直ちに實際に役立ち得るものである。

青年の産業研究

大日本青年團本部編

四六判 二〇〇頁 〇・五〇 日本青年館

昭和十二年度本團産業賞受賞の二研究と、同十二、十三年度の共同研究助成金交付を受けた五團體の事績並に個人研究助成金を授與された六研究を紹介したもので、受賞者並に研究題目は左の通りである。

産業賞 農業經營の科學的研究(武田喜一)、養鶏界に輝く二大功績(矢田一四四)

共同研究助成金 郷土振興の爲に伊勢薯の共同研究(三重縣津田村青年團)、蔬菜栽培に新機軸を生む(兵庫縣賀集村青年團)、茶園肥料土壤の合理的研究(靜岡縣葉梨村横見青年會)、大根菜種の共同研究(靜岡

縣大淵村青年團)、移植麥の研究(山口縣祖生村青年團)

個人研究助成金 意外の廢物も煉炭製造の研究(栗原要重)、茶種に關する研究(澁谷幸一)、農業經營に於

ける園藝及養畜の價値に就て(原口新平)、五年間の田園生活記(小野寺平左衛門)、有畜農業組織下に於

ける乳牛經營の改善(橋本一次)、小都會に於ける商店經營の研究(中島定男)

東 畑 精 一 著

四六判 三三九頁 一・七〇 中央公論社

米

本書は東大教授農學博士東畑精一氏が、米穀問題を中心とする現下の食糧問題に關し「嘗て通俗の新聞や雑誌に掲載せられたもの」を集録したもので、著者によれば、通俗的であることを狙つた限りに於て「正確なる表現は犠牲にせられてゐるし、また單なる隨想に過ぎないものもあるけれども、事態の大綱を傳へることは努めた」とされてゐる。

日本農業は異常な勞働力の集積による「日本のピラミッド」であるとするのが著者の持論であつて、農業生産の問題の根源はこゝにひそむことを絶えず主張せられるのである。かゝる日本特有の食糧生産の構造は平時においても問題を提起してゐるわけではあるが、それが戦争を通じて如何に促進せられてゐるかを、本書においても力説せられてゐるのである。

現下食糧問題の諸相について詳細綿密、しかも平易な解説書として見逃すべからざるものである。

水稻栽培の實際(本州西部地方の卷)

宇 垣 猛 著

三六判 二六七頁 一・二〇 養賢堂

著者は岡山縣立農事試験場技師。この本は經濟農藝叢書中の一冊として刊行されたもので、著者の勤務さ

れてゐる場所の關係上、南は瀬戸内海に面せる暖地より、北は山陰脊梁山脈に接する寒冷地に至る可也廣範圍に亘る稻作法を研究されたものである。しかもこの稻作法は、本州西部地方の平坦地、山間部、溫暖地、寒冷地の稻作法と類似した所が多い爲、本書に現れた研究はそのまゝ之を本州西部地方の稻作法の参考とすることが出来るのである。その意味で本書には特に「本州西部地方の卷」と云ふ傍題が附せられてあるわけである。品種の選擇並に改良の問題、採種並に採種圃の經營の問題、苗代の問題、耕地の整理問題、肥料の問題、害虫の問題等々多方面に及んでゐる。記述はやさしい。

實用農藝全書 第一九、二二

明文堂發行

特小判 各一・二〇

第一九 蔬菜病害虫

織田富士夫
瀧元 清透 著

第二二 堆肥

吉田 一男 著

前者は最初に汎論として病害の原因、その防除法を總論的に述べ、以下各論として蘿蔔、白菜、甘藍、山葵、甘藷、里芋等々の順で二十七の蔬菜についての病害虫防除の實際が述べられてゐる。著者の一人織田氏は福岡縣立農事試験場技師、瀧元氏は九州帝大植物病理學教室勤務助手。

後者は戦時下農村に於ける農業生産の確保増進の爲の最大關心事である肥料問題中、自給肥料の大宗たる堆肥の質的向上並に増産を研究したものである。科學的な試験成績を基礎とした實際的のものである。著者は農林省技師。

機械工業講話

東京商工會議所編

四六判 三五八頁 一・八〇 丸善株式會社

化學工業講話

東京商工會議所編

四六判 三〇六頁 一・八〇 丸善株式會社

我國の工業界は近時急速に發展し、世界の水準を摩せんとする部門も尠くないが、國民一般の科學的常識の水準は必ずしも高いと云へない許りでなく、特に工業技術の常識に到つては歐米に比し遜色あるを認めぬわけにはゆかない。本書は生産力擴張の國策線にそひ、東京商工會議所が工業知識の普及と商工業事務の能率増進とを圖るため、昭和十三年六月催した工業講演會の講演を編纂したもので、各講師の嚴密な校訂を経たものである。内容は稍々専門的に亘る部門もあつて、工業人の常識としても少し程度が高いと云はれる向もあるが、素養の程度に依り參考すべきものが多々ある事と思ふ。内容の一斑をあげてみれば、

機械工業概論(工學博士關口八重吉)、自動車工業(工學博士隈部一雄)、航空機工業(工學博士富塚清)等

化學工業總論(工學博士小林久平)、電氣化學工業(理學博士橫山盛彰)、油脂工業(工學博士内田壯)等

廣告の常識

栗屋義純 著

四六判 二九七頁 一・二〇 千倉書房

著者は明治大學講師である。本書は専ら廣告技術に關する全般的な理解を得るために廣告實行の順序に従

つて重要事項を取上げて、常識的な解説を試みたものである。内容は広告の概念から広告の種類、広告費のこと、広告原稿のこと、広告面のことなど、かなり纏つて研究的に書かれてある。併し説明は平易で、實際に即してゐるから、利用者には役立つやうに出来てゐる。

今日は統制経済の時代で広告の利用は減退した。そのため広告など無価値であると考へられる向もあるやうであるが、實際においては広告は行はれてゐるし、如何に統制経済の世となつても広告の価値はなくなるわけのものではない。商工業関係者にとつては、この世界的経済の舞臺に立つて常に宣傳広告の技術を研究しておく必要があるのである。

漁村計畫と漁業組合

小石季一著

四六判 二九六頁 一・八〇 水産社

著者がこれまで全国の漁村を巡廻してなされた講演の資料を整理し系統づけたもので、漁村にある人々のために、漁業組合を中心とした漁村経済の更生と漁家経済の改善の方策を述べたものである。

政府は昭和七年に更生經濟部を新設したが、その目的は農山漁村に於ける生産組織と流通組織の建直しをして、農山漁村を窮乏のどん底から救はふとしたのである。この様にして一時更生運動が盛んになつたが、この運動に依つて更生の實績を擧げてゐるのは主として農村で、山村之に次ぎ、漁村に至つては洵にその實績が擧つてゐない。之は指導の適正が得られないと云ふ點もあらうが、又漁村に於ける熱意の乏しいと云ふこ

とも著者は甚だ遺憾として居られる。そこで本書は更生を目的とした漁村計畫と漁業組合の實際を詳細に説明して漁村関係者の参考に資せんとしたものである。

内容は漁村計畫の總論的なものを第一に掲げ、この計畫に必要な基本調査、計畫樹立の實行等にも及んでゐるが、この本の主要なる部分は「漁村計畫は如何なる點に重點を置く可きか」と云ふ一章である。こゝで根本問題として精神作興を基調とすべきことを説き、次いで漁業経営組織の改善、經營費の軽減、販賣の合理化、負債整理事業、共同施設事業、漁家経済の改善、男女青年團並に婦人會の活動、漁村の教育施設充實の問題等が順次説明されてゐる。そして之等の計畫を實行する實行團體としての機能の發揮を漁業組合の活動に期待して、後はこの漁業組合の組織論に終つてゐる。文章は平易で読み易い。

時局と漁業組合運動

星 四郎 著

四六判 一九三頁 一・〇〇 水産社

昭和十年に一度出版された「漁村と協同組合」と、之に新に執筆された「時局と漁業組合運動」と云ふ二篇を合冊上梓されたものである。

内容はAと云ふ漁村に住んで毎日漁民と接して生活してゐる一人の漁村人と、Bと云ふ漁村更生の仕事に關係してゐる一人の役人との會話體になつて居り、この二人が漁村生活の現實を語りながら、その経済更生を論じ、協同組合を批判し、後半に於ては時局下に於ける漁業組合運動を論じてゐる。小石季一氏の「漁村

計畫と漁業組合」ほど體系的ではなく、又理論的でもないが、唯會話の形式で平易に如何にも具體的にこの問題を扱つてゐる處にこの本の特色がある。

666
102

666
102

推薦圖書目錄 第二十二輯

昭和十五年四月十八日印刷
昭和十五年四月廿二日發行

【非賣品】

編輯兼
發行者

東京市四谷區霞ヶ丘町十一
熊谷辰治郎

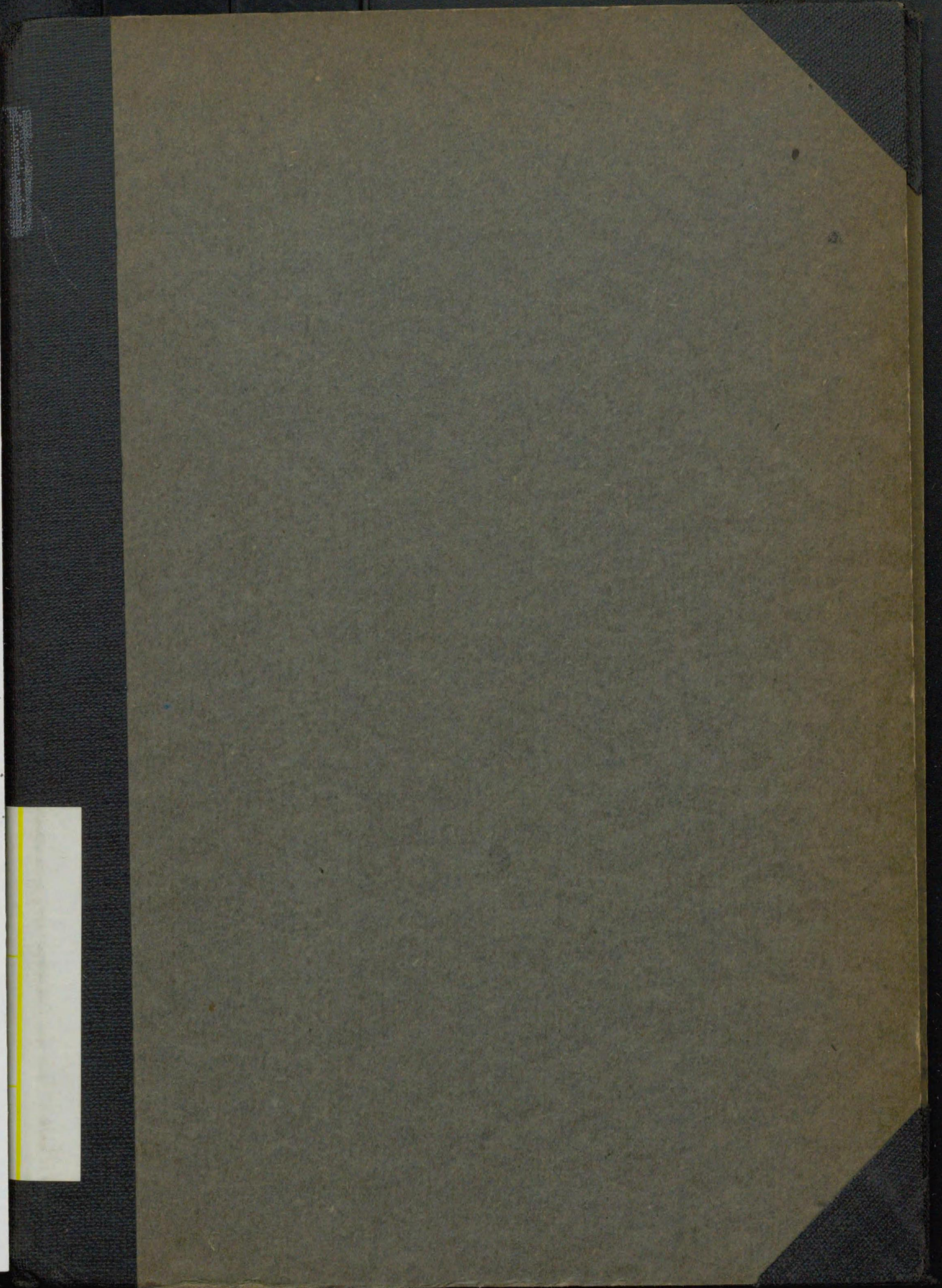
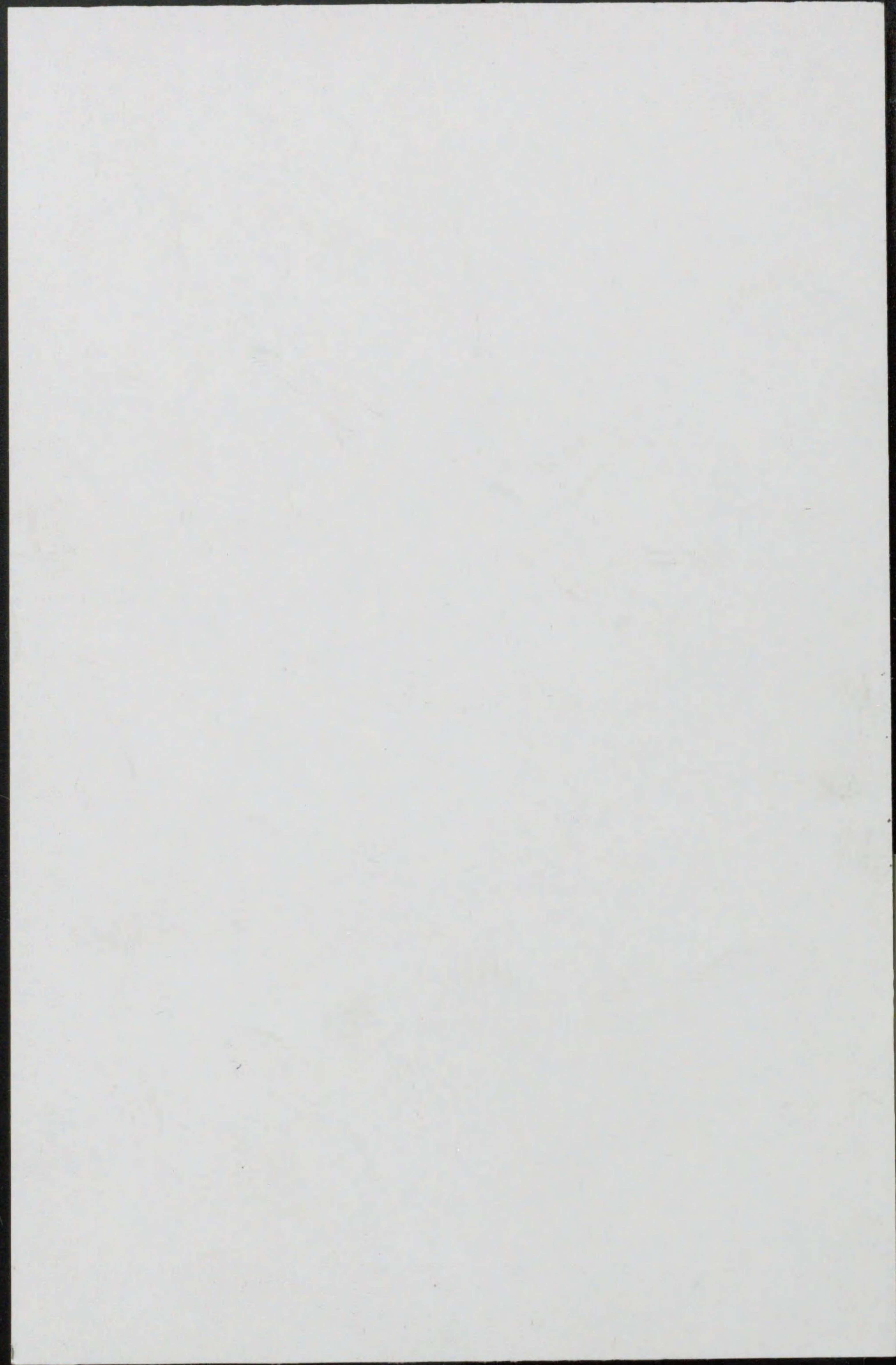
印刷者

東京市淺草區小島町二ノ十五
南金太郎

發行所

東京市四谷區霞ヶ丘町十一
大日本青年團本部

666
102

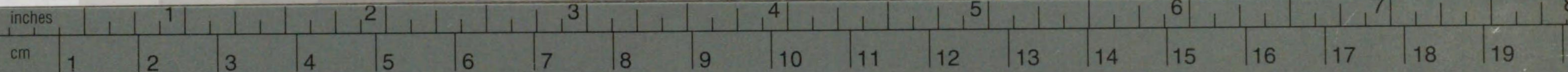


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

